

日本古典文學大系 84

古今著聞集

岩波書店刊行

昭和 41 年 3 月 10 日 第 1 刷 発行 ©

定価 1000 円



校 注 者

なが
永
しま
島

すみ
積
た
田

やす
安
い
勇

あき
明
お
雄

東京都千代田区神田一ツ橋 2ノ3

発 行 者

岩 波 雄 二 郎

長野市中御所 2ノ30

印 刷 者

田 中 忠

発 行 所

東京都千代田区
神田一ツ橋2ノ3

株式
会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 説	三
凡 例	四一
序	四七
卷 第 一 神祇第一	四九
卷 第 二 釈教第二	七〇
卷 第 三 政道忠臣第三・公事第四	一〇七
卷 第 四 文学第五	一三
卷 第 五 和歌第六	一四〇
卷 第 六 管絃歌舞第七	一六六
卷 第 七 能書第八・術道第九	一三三
卷 第 八 孝行恩愛第十・好色第十一	一四三

卷第九	武勇第十二・弓箭第十三	三六
卷第十	馬芸第十四・相撲強力第十五	三八五
卷第十一	画図第十六・蹴鞠第十七	三八
卷第十二	博奕第十八・儉盜第十九	三三一
卷第十三	祝言第二十・哀傷第二十一	三六〇
卷第十四	遊覧第二十二	三七七
卷第十五	宿執第二十三・闘諍第二十四	三八四
卷第十六	興言利口第二十五	四〇五
卷第十七	恠異第二十六・变化第二十七	四五三
卷第十八	飲食第二十八	四七五
卷第十九	草木第二十九	四九一
卷第二十	魚虫禽獸第三十	五〇九
補注		五四七
古今著聞集標目		六一三

解説

一 古今著聞集序説

1 説話文学の時代

古代末期から中世へかけての日本文学史は、ひとつの説話文学時代を経過したといえよう。たとえば今昔物語集から宇治拾遺物語へという説話集の展開の間には、江談抄をはじめ打聞集・古本説話集・富家語談その他がつぎつぎと編成されており、中世に入ってからでも説話集編成の動きは、古事談・発心集・撰集抄・十訓抄・古今著聞集以下の結集として、おとろえることがなかったのは周知のとおりである。しかし問題は、この時代がひきつづき各種の説話集を創出したということだけにあるのではない。同時に、この時期の作品の多くが説話的な姿勢をとっており、また作品の本質的な契機として、説話的なものを内在せしめることなしには成りたちえなかったという点をあわせて、説話文学時代という呼称も可能になってくるのである。

古代末期の歴史物語としての大鏡が、すでに説話的な形式をとろうとし、中世に入っては、無名草子のような物語批評の書でさえも、同じ形式を借りようとした。さらに物語文学の世界では、住吉物語の異本群などに見られるように、物語の性質そのものの説話化が進行しており、保元・平治物語や平家物語のような語りものも、説話的なものの媒介によって、はじめて叙事詩的文学としての画期的な飛躍を遂げたのであるし、また徒然草のように批判的・思想的な文学でさえ、説話的なものをふまえることが少なくなかった、などという顕著な事実がある。これらによっても、古代末期から中世へかけての日本文学が、いかに広くかつ深く説話世界にあいわたっていたか、またそのことによって文学の質を変革し、かつ享受者層を拡大かつ更新したかということが明らかである。それは中世文学を中世文学たらしめた要素の一つに、説話文学の作用が

決定的なものとしてあったということを意味している。

しかし説話文学の、他に代替を許さない独自の文学性は、媒介され止揚されて、他の作品に摂取されたところに見られるだけではなく、当然自立した説話文学そのものに最も鮮明に表現せられるはずである。今昔物語集から宇治拾遺物語へといる当時の説話集作品群の展開が、説話文学時代の中心にあり、その価値の中軸となることはいうまでもあるまい。

ところで、これら説話集群の展開を歴史的に点検すると、今昔物語集と宇治拾遺物語とは、あきらかに質の転換が見られるし、宇治拾遺物語から十訓抄・古今著聞集へのプロセスにも、また一つの段落があり分化がある。さらに沙石集・元亨釈書等の時代が、また新しい質の飛躍を示している。この点の論証はいま省略し、いちおう結論的にいえば、この四つの説話集時代の第三の時期に、十訓抄とはば並行して編著され、しかも同時代の説話文学としての十訓抄とも、また異質の世界を形成したのが古今著聞集であった。

Ⅱ 古今著聞集の成立

古今著聞集は、その序や跋文によれば、従五位下(朝請大夫)ほどの下級官人であった橘成季が、官をやめ閑暇をえて編著したもので、建長六年(三三〇)十月の成立である。すべて二十卷三十篇、説話の内容によって分類された各篇の冒頭には、まず、それぞれの篇に集められた説話群の話柄の内容に応じた、事の起原あるいはその本質・性格についての要約的なしきが記され、つづいて、すべての説話が事項の年代順に配列されている。「部をわかち巻をさだめて、冊篇廿卷とす。篇のはしづくに、いさゝかそのことをこりをべて、つぎ／＼にそのものがたりをあらはせり」(跋)と記しているとおりである。全巻のはじめには、漢文による序文と三十篇の内訳を示す総目録とがあり、巻末には仮名文の跋と著者の署名とがあつて、説話集編次の形式としては類のない整然としたものである。そのうえ多年にわたる収集の功を終えた建長六年十月十六日には、満足の心をこめて、「竟宴の儀」をとりおこなっている。まず白楽天・人丸・廉承武の画影に供物をそなえ、三十篇のはしがきと各篇の物語一段を読みあげ、管絃を奏し、題を課して詩文と和歌とを講じ、夜を徹して飲をつくしているのであるから、日本紀寛宴以来の、また近くは新古今集寛宴などの盛儀にならおうとしたものに相違ない。著聞集各篇の呼称も、神祇・釈教にはじまり、祝言・哀傷・遊覧といった勅撰和歌集の部立またはそれに準じたものが目立ち、真名序と仮名序の

そなわっている点をもあわせて、王朝文化の象徴としての勅撰和歌集の形式を意識的にならったことを示している。このような形式をあくまで求めようとし、またそれを実現したところに、後に述べるような著聞集の作品としての本質は、端的に表現せられているのである。

もともと、著聞集の編著を完遂した著者の意図としては、「この集のをこりは、予そのかみ、詩歌管絃のみち／＼に、時にとりてすぐれたるものがたりをあつめて、絵にかきとよめむがためにと、いそのかみふるきむかしのあとより、あさちがすゑの世のなさけにいたるまで、ひろく勘へあまねくするすあまり（跋）と記しているように、「詩歌管絃のみち／＼」における「すぐれたるものがたり」つまり王朝世界における風雅の道についての古今の佳話を撰び出し、これをおそらく絵巻として残そうとしたところから、収集の業をはじめたものに相違ない。また著聞集編著の発想は、「いにしへより、よきこともあしきことも、しるしをき侍らずは、たれかふるきをしたふなさけをのこし侍べき」（跋）と記しているとおりの承久の乱における貴族の決定的な敗北の後、いまや根底から崩壊しようとする古代貴族社会の残影に立つて、彼らの黄金時代を懐古し、もはやほろびようとしているその姿を、文字また絵画として、後の世まで留めおこうとしたところにあった。しかし、「あさちがすゑの世のなさけにいたるまで、ひろく勘へあまねくするすあまり、他のものがたりにもをよびて、かれこれきゝつてすかきあつむる程に、……たまほこのみちゆきずりのかたらひ、あまさかるひなのてぶりのならひにつけて、たゞにきゝつてにきく事をもしるせれば、さだめてうける事も、又たしかなることもまじり侍らんかし」と書きつづけているのによれば、多年にわたる編成の過程で、最初の意図は必ずしも貫徹されず、予定された優雅な佳話からすれば、「他のものがたり」というほかなかった卑俗な語りぐさにも及んでしまい、けっきょく「うける事」、つまり「たしか」ならぬ説話までも、あわせ収集せざるをえなくなったことを、著者自ら認めるようになったのである。

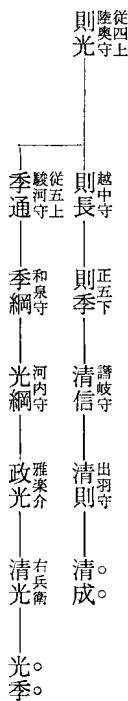
著聞集が成立した十三世紀半ばという時点において、多数の同時代の説話集をさしおいて、特に王朝時代に成立した宇治大納言物語や江談抄の亜流であることを、むしろ積極的に確認し、「夫著聞集者、宇梶・亜相巧語之遺類、江家都督清談之余波也」と、まず序文に記したところにも、著者の同時代を越えて王朝時代に直接しようとした姿勢は読みとれるのであるが、それにもかかわらず、彼の最初の意図は、そのままには遂げられることなく、けっきょく、「そこはかとなきすゑること」や、「うける事」としての虚妄の説話までを氾濫せしめることになったのである。そうして、勅撰集にもなぞらえたような著聞

集の中に、これらの「うける事」を導入する通路となったのが、ほかならぬ説話文学というジャンルに特有の世界であったことが、このばあい特に注目されなければなるまい。古今著聞集も、説話集であることによって、著者の意図にかかわらず、王朝文学の単なる末流であることをまぬかれえたからである。

Ⅲ 古今著聞集の著者と名義

古今著聞集の著者が自ら草したと認められる跋文には、「朝請大夫橘成季」という署名があり、著聞集の著者を「橘季成」(本朝書籍目録、類従本)や「橘季茂」(同、寛文十一年版)であるとする記録は根拠を認められない。その自序によっても「橘南袁」とあり、これは成季(南理須袁^{メテ})の上下二音をとったいわゆる反名で(藤原明衡の安蘭、中山忠親の達幸のごとき)、これによっても季成や季茂ではありえない。

しかし橘成季の伝記はまだよくわかっていない。黒川春村の碩鼠漫筆は、明月記の寛喜二年四月二十四日、賀茂祭共人交名の条に、「右衛門尉成季近習無双、故光季養子、基成清成等一腹弟」と記されていることを指摘しているが、大森志朗氏はこの点に着目し、さらに橘氏系図(正統、類従本)を補って、成季が橘光季の養子、つまり橘諸兄十六代の孫となったこと、また「余稟^テ芳橘之種胤^ニ」(序)とあるのによれば、その「出生も橘氏であつたかも知れない」(『古今著聞集考』)と推定している。いま橘氏系図(類従本)の要点を抄出すれば、



とあって、則光から五代後に清成がある。明月記の「故光季養子、基成清成等一腹弟」によって、成季が清則の子の清成と兄弟であるならば、彼は橘氏に生れ同族光季の養子になったことになるが、系図の示すように、年代上にも多少の疑問が残らないでもない。

なお中島悦次氏も、この記事と関連して、明月記の寛喜二年の条には、藤原道家が北政所と御泉殿に渡御したという記事

に、「侍成季之外、総無^三他人^二（五月廿五日）」とあるので、成季は近習の侍として特に道家に親近したらしいこと、また同三年八月十五日の条にも、隨身侍に成季の名が見え、「左衛門成季」として競馬を仕っていることを指摘し、「名隨身として當時花々しい名声を博してゐたやうである」（『橘成季』二章「橘成季の伝記」と記している。また藤崎俊茂氏は、著聞集の跋に、「蓮氏之非に似たり」とあるので、淮南子、原道の「蘧伯玉^ハ、年五十而有^ニ四十九年非^{リキ}」という出典からすれば、成季が著聞集跋文を記した時は、五十歳の頃であらうとする推定をおこなっている（『古今著聞集の時代性』^{和十六年一月号}「古典研究」照）。もしこの出典を文字どおり適用できるとすれば、成季の生年も判明するが、これをそのまま五十歳の証拠とすることには、なお疑問があらう。

ところで大森氏はまた、成季が法深房藤原孝時に太鼓の打ち方を相談したという、「宝治三年六月、仙洞御講に蘇合一具侍しに、予、太鼓つかうまつりしにも、両帖にうち付き。且是、法深房に申合所なり」（『云段』）の記事等からして、彼はこの法深房孝時の弟子であらうとし、孝時の弟子隆円^ノの著、文机談第五（以下、大森氏の引用によらず、菊亭本文机談の本文による）に、

一、伊賀守成季、これも孝時が弟子也。このながれをうけさせ給人々、中将公兼、実冬卿など聞させ給。譜も比巴犀丸も花山院納言へまいりにけり。子孫ありとも聞へず。

とある伊賀守成季も、「橘成季の父祖が代々国守であることから考へても、著聞集の作者を指すものと考へてよからうと思ふ」としている。なお、この花山院納言は大納言長雅で、「長雅が大納言であつたのは弘安八年と九年とであり、文机談もその頃の改修を経たものと考へられてゐるから、右の「子孫ありとも聞へず」といふ字句から、後宇多天皇の御宇の末までには成季の没してゐることも知られるわけである」とする注目すべき指摘をおこなっている。ただ右引用文中の「弘安八年と九年」は、公卿補任によれば弘安七年と八年とであり、また大納言時代には一般に権大納言時代をも含みうるし、長雅は文永五年十二月「任権大納言」（公卿補任）とあるから、推定年代はさらに遡ることができ。はたして文机談第五には、

一、刑部権少輔孝頼家七代のるいゑうをついで孝時の一子たりしかば、文書口伝のこる所なくゆづりうけられぬ。但ちゝの後いくはどなくて文永九年五月十九日に卒し侍ぬ。こそくちをしく侍しかども、度々の説にうち物ひき物不足なくあひ給にき。孝経の文書をさへゆづりゑられぬこそ神妙なれと人々申けり。これも十八にて灌頂をとぐ。このながれをうけさせをします君達、西園寺大納言実兼、花山院大納言長雅、徳大寺中納言公孝、中納言公宗、東院中納言公守、宰相中将具氏、このうち花山はもと成季に伝させ給ける。身まかりて後、御灌頂をば孝頼にぞうけさせ給け

る。すでにあやうく聞へければ、みなこの蓬屋にわけいらせをはしましけるは、黄壤のおもひいでにてこそ侍らめとあはれ也。

とあって、花山院長雅は成季に琵琶の伝授を受け、成季の没後彼の伝えた琵琶犀丸も譜も、この花山院に伝えられたのである。また花山院は成季の没後には、孝頼に灌頂を受けられたとあるが、その孝頼も父孝時の没後間もなく、文永九年五月十九日に卒している。したがって花山院が灌頂を受けたのは文永九年五月十九日以前であり（これは前記の花山院大納言を権大納言時代と考えたことと符合する）、成季の没年は、当然それ以前に遡る。つまり橘成季は、文永九年（一一三三）五月十九日より前に死去しているに相違ない。文永九年は嵯峨天皇崩御の年で、著聞集成立の建長六年（一一三四）から十八年後にあたる。成季の没年は、それよりも遡らねばならない。少なくともこれによって、成季の没年は大森氏の弘安八・九年説より約十五年は遡りうるのである。

成季の伝記資料は、そのほか著聞集の記事以外ほとんど知ることができない。ただ擲金抄（弘安元年戊寅六月十四日書写の奥書ある模写本で、内閣文庫蔵、三巻本の内上巻欠）の下巻所収「絶句部人事」の項に、

偷見^{ユミ}大府^{ノリヲル}参^{マシ}安楽寺^ニ詩賦^ヲ一絶^ヲ
二百韻詩雖^ニ竊^ニ棄^ニ漢家日域^ニ未^ニ曾有^ニ成季

の一絶が録されているのは、橘成季によるものであろうか。彼が漢詩文をよくしたことは著聞集の序跋等によっても疑えないので、引用して後考を待ちたい。そのほか成季が和歌の道に通じ絵画を愛したことも、序跋によって明らかであるが、なかでも琵琶に自信のあったらしいことは、文机談の記事のほか、著聞集の管絃篇には、珍しく琵琶についての音楽上の批判や自説の主張などを展開していることが、これを証明している。師承関係としても師の藤原孝時（法深房・馬助）およびその一家の記事は集中に多数あって、孝時一族との交流の深かったことがわかる。以上のほかに鴨長明と親交のあったはずの大臣親守が、成季としたしく交際していること（六段・二四段）など興味があるが、なお詳細は不明であり、著聞集そのものの語るところに聞くほかはない。いずれにしろ従五位程度の官人にすぎなかった彼は、序文に示すようにやがて致仕し、「多^{カシヨリカ}暇景^ニ以降^ニ閑^ニ度^ニ（祖^{ノカタ}年^ニ）」と著聞集序に記しているような閑暇をえた、おそらく晩年あるいはそれに近い頃、詩歌管絃の道を中心とした、好ましい物語を集めはじめたものであろう。やがてそれは収集の範囲を拡大し、鎌倉中期における

貴族的視點に立った、いわば百科全書的な著述として結実するのである。

なお古今著聞集の名義について一言付記すると、その「古今」は、「只今知_レ日域古今之際_二（序）や、「いそのかみふるきむかしのあとより、あさちがすゑの世のなさけにいたるまで」（跋）とあるのによつており、「著聞」については、山岡俊明が引例した、「文字の出所は西漢書四十九篇錯伝に云、朕既不徳、又不敏、明弗_レ能_レ燭、而智不_レ能_レ治、此大夫之所_二著聞_一也」と是等の意にや」（『類聚名物考』）や、「此天下所_二著聞_一也」（『前漢書』元帝紀、「名声著聞」（『後漢書』高鳳伝）等の用例、また日本でも日本紀・続日本紀等以来同様に使用されている普通の語義と見てよい。またその読みかたは、「古今」は「日域古今之際（序）」の「ココン」、「著聞」は前掲の用例とあわせて、本朝書籍目録の善本、彰考館蔵本等に、「著聞集」と仮名書きしているのに従うべきであらう。この古今著聞集という名称には、王朝時代の第一勅撰集、古今和歌集に準拠し、実録・説話による古今集であると自負する著者の思想が、かいまみられるようにおもわれる。

IV 古今著聞集の本質

古今著聞集の著者橘成季の胸中には、「いにしへより、よきこともあしきことも、しるしをき侍らずは、たれかふるきを、いたふなさをのこし侍べき」（跋）と記しているとおりに、古代貴族世界に対するやみがたい追慕の情があり、それは説話の結びにしばしば附記された、「昔はかく期せざる事も、やさしく面白き事、常の事なりけり。いみじかりける世なり」（『五段』）、「むかしは此事つねの事なりけるに、中比よりたえにけり。くち惜き世なり」（『四段』）、「かゝるすき人も、いまはなき世なりけり」（『六段』）などの言葉として、美しいもの、よきもののほろびゆく現在と、それらが「つねの事」として生きていた「いにしへ」とをひきくらべ、「いにしへ」に対する無限の憧憬を、ほとんど詠嘆的にくりかえしているのによつても、このような懐古的な思想が、著聞集編成のいわば第一原理であつたことは疑えない。

著聞集の全説話を、かりに年代的に平安時代と鎌倉時代とに二分してみると、全説話数七二六段から抄入追記の疑いあるもの七七段とはしがきの二九段とを除いた六二〇段のうち、約二二〇段、つまり全段の約三分の一がほぼ鎌倉時代の説話で、約三分の二という圧倒的多数が王朝時代の説話である。さらに各篇を個別的に点検すると、一篇の過半数の章段が鎌倉時代の説話であるのは、偷盜・興言利口・魚虫禽獸の三篇（なかでも興言利口篇は、例外的に六七段中五七段という圧倒的な近き

世の説話を収めていて、この篇の特異な性格を端的に示している）であるが、いまこの三篇を除いた他の二十七篇によって、比率を求めると、その結果は、いっそう強く古代王朝時代の説話の方に傾斜するのであって、けっきょくのところ、特殊な数篇を除外すると、一般的には昔物語が圧倒的な比重を持っていたことになる。

したがって、このように集編成の形式においても、またその実質においても、懐古思想につらぬかれた著聞集が、それだけで終ったとすれば、懐古の詠嘆に終り、作品としての新しさを開拓できなかったであろう。ところが著聞集には、これと同時に、もう一つの基本的な思想があった。それは、著聞集は在来のおくり物語などと異質の、事実にもとづいた説話の集成であるという自覚である。たとえば「頗雖^{ドモ}爲^{タリト}ニ狂簡^{キヤウケン}」聊^{リョウ}又兼^{ヤス}実録^{ジツ}」と記した序文の表現にもうかがわれるように、もともと成季の編成は、「ひろく勘へあまねくしるす」つまり証拠や典拠にもとづきながら説話を収集しているし、できるだけ「或は家々の記録をうかゞい、或は処々の勝絶をたづね」という態度によっている。だから収集した説話の出典を、たとえば宇治左府御記・西宮記・北山抄・李部王記・小野宮記等々として明示したりするが、明示しないばあいも、中右記・江記・為範記その他にすることが後人によって注記されたり、またそれを指摘できるものが少なくない。

いま、これらの文献を著聞集が典拠としたばあい、たとえば台記や中右記のような記録の筆者を説話の主人公とするには、宇治左府頼長や中御門右府宗忠を客体化し、漢文を仮名文に改め、適宜抄略あるいは章句を前後せしめることはするが、本文は細目にいたるまで忠実に、そのまま抄入したものが少なくない（たとえば台記を典拠とした二八四段のごときは、出典とほとんど同文といってよい。↓巻六補一四八）。また、一般に説話の結語となる主観的な語句は、著者自身の感想であるのが普通であり、たとえば台記を典拠とする二八二段の結語「いかに面目に思ひけむ」や長秋記に拠ったと認められる二七二段の結語「むかしはかく芸によりて、賞のさたありけり。ちか比より、その善悪の沙汰までもなくて、たゞ一者になりぬれば、左右なく賞をおこなはるゝ習になれば、頗無念の事也」などの感想文などは、原拠にないものである（↓巻六補一二八および補一二八）、時には中右記を出典とする二六〇段の文中の「糸竹のしらべことに面白かりけり」が、原拠に「糸竹之調自然絶妙」とあり、六八四段の結語「やさしかりける事也」が、同じく中右記に「誠に優美也」とあるのを仮名文に改めたと認められるなどは、主観的な感想文にいたるまで原拠のまま、忠実にこれを再現した例である。そのほか後冷泉院根合の記事を、ほとんど全く同文のまま収めた六五五段や、源順集の詞書をほぼ同文に近くとり、和歌だけは、一判の詞、のこりの

歌ども、あまりにおほくて書もとづめぬ也」と、成季の言葉でことわって抄出した六五二段のような例は、集中いたるところにあって、著聞集と出典との関係は、この程度にまで忠実な引用であることの確認できるばあいが少なくない。

さらに口承による説話のばあいでも、「まさしくみたるとて人の語侍し也」(三四段)、「此事更にうける事にあらず。法深房かたり申されしうへ、三位入道此事を記したる状に判を加て、法深房のもとへをくりたる状を書侍なり」(五二段)、「かの寺いまにあり。さらにうきたる事にあらず」(五六段)など、各所に見られる結語によっても、著者が原拠としての記録なり口語なりを、いかに取扱おうとしたかがわかる。著者は何とかして、それらが、およそ実録や実説にもとづいたものの、つまり「たしかなること」(跋)であることを実証しようとし、またしばしば、それを主張しようとしないうちはおれなかったのである。したがって、「いづれか実説に侍らん、尋ねべし」(三四段)、「此事たしかに申つたへ侍れども、兼国松殿の官人となりたる事たしかならず。猶尋べし」(五七段)などと、明確にしがたいばあいには、さらに実説を追求すべきであると注記するのである。この態度は、すべての説話を、ほぼ正確に年代順に配列しようとした著聞集の編成法とも関連している。年代順の配列ということも単なる形式整備だけではなく、そのことによって、収集せられた説話が実事であり仮構でないことを主張するものでもあったに相違ない。この実事であることを主張する思想は、一方では著聞集の懷古思想を、確かな事実にもとづいてささえる役目をはたすと同時に、他方では集のなかに「まじり」(跋)入った「うける事」、たとえば興言利口・魚虫禽獸篇などに圧倒的な比重をもって収集された「みちゆきずりのかたらひ」のとりあつかいをも規定したのであって、「あまさかるひなにてぶりのならひにつけて、たゞにきゝつてにきく事」とするように、同時代の口語りさえも、やはり「たゞに」(直接じかに)聞きとった説話であることを主張せしめるものでもあった。以上二種の説話群は、著聞集という一個の作品のなかにあって、いちおう矛盾するもののように見える。一つは古典的で優雅な貴族世界の实話であり、他はそれらと裏はらの卑俗な口語りの世界であるからである。しかし、この二つの世界は同じ著聞集のなかに共存しているのであって、問題は著聞集において、両者がいかに結合されているかにある。この結合のしかたを確かめるためにも、全卷三十篇をここで鳥瞰しておく必要がある。

まず天地開闢の事を記した神代紀を小序にしたてた卷一神祇篇は、もともと神聖な卷であるはずだが、実は化生権化の説話が多く、この点では釈教篇と本質的に差別がない。量的にも優勢な釈教篇とあわせ考えると、卷頭第一卷を占める神祇篇

も、実質的には釈教篇に主位をゆずることがわかる。釈教等と等質の本地垂迹説話を除くと、神祇篇は功德効験譚が中心となっていて、貴族社会における昇官叙任を切願する人びとのむれが神祇篇の主要な主人公たちである。この点でも釈教篇と同様であるが、釈教篇では往生説話について、また単なる靈験譚でない聖僧たちの行為が、凡俗の及びがたい不可思議な権化の姿として多く登場する。その範圍は空也・良忍の念仏譚や源空の一向専修説話にまで及んではいるが、これらはすべて化度衆生譚であり往生説話であって、中世の新興仏教の本質にふれた念仏説話とはいえない。特に密教(真言)に関する説話が多数を占めており、成季の宗教的関心がいかに古典的なものであったかを示している。

著聞集中、圧倒的な比重で大量に収集されているのは、政道忠臣・公事・文学・和歌・管絃歌舞・能書・画図・蹴鞠・祝言・哀傷・遊覧等、その篇名でもって、およそ内容の想像される王朝貴族生活に関する諸篇の説話である。これらの説話は、一般に各篇の示している分野に見られる、かつての貴族的な盛儀が、いかに優雅でめでたいものであったかを懐古し讃嘆し、「むかしは此事つねの事なりけるに、中比よりたえにけり。くち惜き世なり」(三六段)、「いまそかやうの事もたえ侍ぬる、口惜かな」(二三段)などと、おとろえゆく今の世の姿を、繰り返し嘆きつつ結ばれることが少なくない。

これらのほかに、武勇・弓箭・馬芸・相撲強力篇のような、貴族的でないかのように見られる諸篇があるが、これを点検してみると、弓箭は小弓の遊宴や賭弓、馬芸は随身の競馬、相撲は相撲の節会の挿話といった内容が多く、およそ貴族社会の行事や慣例による遊戯等に関する説話が中心となっている。また武勇篇には、頼光や義家のような武家が主人公として登場するが、たとえば義家についても、「衣のたてははころびにけり」の連歌で有名な十二年の合戦の優雅な挿話を、「さばかりのたゝかひの中に、やさしかりける事哉」(三六段)と嘆賞したり、人間業とも思えない彼の武術を、「神に通じたる人」(三八段)として感嘆しているだけで、本来的に武士的なものは、必ずしもとりあげられていない。もちろんなかには、相撲強力篇(三六段)に登場する畠山重忠のような、重厚かつ強剛な関東武士の人間像が簡潔にとらえられているばあいもないではないが、著者のこれに対する感動は、「目おとろきたる事なり」で、義家へのおどろきと等質のものにすぎない。もっとも相撲強力篇には、遊女金の強力物語(三八段)のような「あまさかるひなのでぶり」も見えはじめるが、これらは博奕・偷盜・宿執・闘諍・興言利口・飲食・魚虫禽獸篇などの説話と等質の庶民世界の語りぐさである。この種の説話を最も大量に収めたのが興言利口篇で、この篇所収の説話の年代が他の篇にくらべて圧倒的に著者と同時代的な、いわゆる「近比」のものであった

ことはすで見えてきたとおりである。興言利口篇には、下層の官人や侍たちが故実や貴族的常識を知らぬために、失敗して笑いを買うような、また貴族仲間の軽口やしやれ言葉のおかしさに興味の中心をおいた説話なども多いが、段の進むにつれて、破戒の僧尼あるいは山伏・神主、なま蔵人・青侍といった、いわば有象無象の人物が活躍しはじめ、一生不犯であったはずの尼が、実は好色無類の女であったり、宮ばらの女房の房事やへひりの判官代の笑話にいたるまでの、尾籠・卑猥をきわめる風俗絵巻が、つぎつぎと展開されるのである。これらの画像は、著聞集の筆が実録的であるために、あくまであらわに人間の弱点をさらけ出してしまふ。その描きぶりは、宇治拾遺物語に見られたような古雅でユーモラスなところがない。古典的な作品であったはずの著聞集において、かえって雅味のない、ほとんど節度をこえた露骨な描出にさえなっている。このような人物の群像を笑いながら見ている貴族たちの姿には、かえって鎌倉時代中期という閉塞状況に生きた貴族の人間の生きかたが、いかにも如実にかいまみられるのである。

古今著聞集の著者は、巻一の神祇篇からはじめて、貴族世界のはれ（晴）の場での挿話を集め、つぎつぎと優雅な絵巻物としてこれを展開して見せ、いまはなき美しい世界を懐古し思慕する人びとの心をとらえるのだが、同時に同じ集のなかに、そのような風雅な世界とは対蹠的な世界の説話が、大量に流れこんでしまったのである。しかし、この二つのものは、じつは当時の貴族たちにとって、彼らの生活の表と裏とを同時に示すものにすぎないのであって、けっして別々の矛盾するものではなかった。つまり神祇篇をはじめとする文学・和歌・管絃歌舞篇などをつづく主要部分は、彼らにとつてのはれの生活を示すものであり、興言利口篇などに代表される側面は、同じ貴族たちのいわばけ（藝）の生活をかいまみさせるものにすぎなかったのである。はれの側面において、彼らはもはや新しい生活を生みだす力を失っていたのだから、いにしへの語りぐさでしかなくなった王朝貴族世界を懐古し思慕するほか、どうすることもできなかった。そのことは、けの面においても、その卑俗な生活を追求して、そこに垢にまみれた現実的な人間の積極的な絵巻を展開することにもなりえなかったことと表裏一体のことであった。宇治拾遺物語に見られる、いわば開かれた明るい笑いもちがって、おもてむき正装をこらしたような古今著聞集には、かえって閉じられた人間世界の笑いが見られないだろうか。

なお、このほかにも著聞集のなかには、古典的とか懐古的とかいえない説話を大量に収集した魚虫禽獸篇などがあり、一つの特色をなしている。この篇も最初は、小鳥合せや虫狩りなどのような、貴族たちの遊宴に関する記録などからはじまっ

ているが、やがて、さまざまな魚虫禽獸のたぐい、人魚や白虫までが登場しはじめる。これらには、輪廻転生や悉有仏性の思想に裏づけられた説話の展開が少なくなく、それによって、はかない魚虫禽獸に対する人間的な扱いが生れ、彼らの行為に温かい眼を注いだ動物説話がいくつも見られる。この篇の素材は、地理的にも階級的にも拡大され、貴族の外がわに拡がる広大な世界に、その視野がひらけようとしている点でも、興言利口篇と並んで、著聞集の特色をなす部分であることをつけ加えておきたい。

以上でもって、建長六年という時点における貴族社会の精神の状況は、その表と裏との生活の実態をとおして、著聞集の表現において端的にとらえられていることがわかる。年代順を確認しつつ配列されているうえに、二十卷三十篇に整然と分類され、きわめて広範囲な人事・社会・自然にわたっての具体的な絵巻として展開された古今著聞集における、いわば古代から中世へかけての貴族世界の百科全書的な群像は、それが説話の集であることによって、少なくとも中世の一時点における貴族の人間の内面を、表裏の両面からとらえ示しているのであり、その点に単なる外的な史料としてだけでない文学としての評価が可能であるに相違ない。

V 貴族的説話集の終焉

「夫著聞集者、宇^イ都^ト垂^シ相^{ソウ}巧^{コウ}語^ゴ之^ノ遺^イ類^ル、江^エ家^カ都^ト督^{トク}清^{セイ}談^{タン}之^ノ余^ヨ波^ハ也^{ナリ}」と序文に記しているように、古今著聞集には古代末期に成立した宇治大納言物語や江談抄以来の説話集の伝統があった。そのうち宇治大納言物語については、現在その姿を明らかにすることができないので、著聞集との関係を具体的にたどることはできない。また現存の今昔物語集と古今著聞集との間には出典関係を認めうる説話がない(同類の説話であるばあいは、むしろその他の往生伝や三代実録のような記録が共通の出典になっていると認められる)。しかし、少なくとも江談抄からの影響は、卷四文学篇の注記において示したとおりであって、これを典拠とし、あるいはこれにならって著聞集が編成されたことは疑えない。ところで、著聞集が他の先行説話集から直接継承したものといえは、往生伝の類を除くと、上記の一著以上にはほとんど出なかったように思われる。たとえば打聞集・宝物集・発心集等の仏教説話集にしても、古本説話集・古事談・宇治拾遺物語等の世俗説話集にしても、ほとんど著聞集との間には直接の出典関係を認めがたい。(富家語談との間には、いささかの出典関係を認められそうだが、これは関白藤原忠